郷土室だより

第 72 号

平成 3 年 6 月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 3543 － 9 0 2 5

中央区の海岸線（その四）

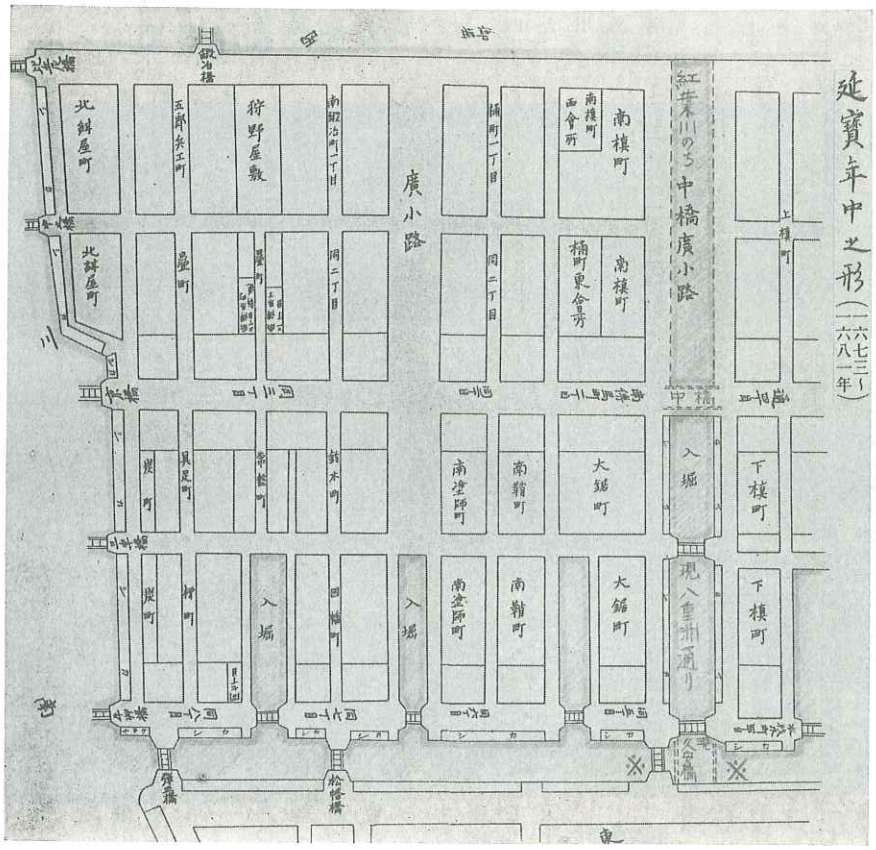
◇中橋広小路（つづき）

前号では、旧京橋の北西詰の小公園（京橋三―四地先）にある「江戸歌舞伎発祥の地」という記念碑のことを取りあげました。そしてその「江戸歌舞伎発祥の地」の旧跡は、記念碑に刻まれた文章によりますと本来は中橋広小路の一角、つまり現在の京橋一丁目交差点付近にあったとされ、現在はその場所に記念碑を建てるスペースがないため、やむを得ず旧京橋の橋のたもとの小公園に建てたことになっています。

これも前号で述べたことなのですが、現在の京橋交差点の原形は、江戸のメイン・ストリートである日本橋と京橋をつなぐ〝通り町筋〟の道路――つまり現在の中央通りが、ほぼ南北に通っていました。

そして日本橋と京橋のちょうどまん中あたりに、この道路に直角に交差する形に紅葉川と呼ばれた船入堀がありました。この船入堀の大体の範囲を、現在ある目標でいうと東は久安橋から八重洲通りを経て、東京駅八重洲大地下街につき当る範囲です。

その有様は下の図のとおりです。



（原図は『沿革図書』中の「鍛冶橋御門外　延宝年中之形」でそれに書き加えた）

図は幕府が編集した『御府内往還其外沿革図書』（以下「沿革図書」と呼びます）の中の「鍛冶橋御門外」の図です。この場所の図は、ここに掲載した「延宝（一六七

三〜八一）之形」をはじめ、元禄・享保（2枚）・天保・弘化・文久（一八六二）までの約一八一年間の町並みの変化を六枚の図として、〝新旧対照〟できるようにしたものです。

◇中橋と紅葉川

中橋とは図のように東海道（中央通り）と紅葉川（八重洲通り）の交点にかけられた橋でした。中橋の名のいわれを江戸時代のいくつかの地誌でみますと、「日本橋と京橋の中間の橋」説と、「船入堀の紅葉川水路のまん中にかかった橋」説つまり、陸上の中間点説と水上の中間点説があったことがわかります。

この中橋の橋の下の紅葉川は前号までに述べてきたように慶長十七年（一六一二）に江戸前島東岸に掘られた十本の船入堀の一本で、幕末に幕府が編集した地誌である『御府内備考』には中橋大鋸町と下槇町との入堀なり。その名付し由来を詳にせず。此川、昔は中橋を歴て御堀に通ぜしが、後埋立て広小路（注＝防火用空地）と成り、其後又町並みと成しゆへ、今も川蹟を中橋広小路町と称せり。

とあるのをはじめ、江戸期の多くの地誌のどれも、なぜ〝紅葉川〟なのかを明快に書いたものはありません。

明快といえば紅葉川は「御城内の紅葉山の麓から流れ出した川」だという説明もありますが、人工の船入堀と自然の川との区別もない〝明快〟なものもあります。

それはさておき紅葉川といえば、昭和二十二年（一九四七）四月から発足した、いわゆる六・三制による新制中学ができた時、中央区では区立紅葉川中学校を都立紅葉川高等女学校内に創設しました。その後、昭和四十七年（一九七二）三月二五日、日本橋中学校と久松中学校とともに閉校となり、この三校が改めて統合して現在の第四中学校（日本橋中学校）になりました。この時に中央区の施設からは紅葉川の名は消えてしまい、いまは兜町にある都立紅葉川高等学校の名に、その名を残すだけになりました。

◇中橋と三伝馬町

すっかり〝脇道〟にそれてしまいましたが、本通りにもどると中橋は江戸のメイン・ストリートの通り町筋と、十本の船入堀の中でも特に大きい紅葉川が交差する場所で、初期の江戸の都心の一つでもありました。

それは、橋の南側には慶長八年（一六〇三）に定められた日本橋を起点とする東海道五十三次の最初の部分における伝馬役（幕府の公用の陸上運輸組織）を受け持つ人々の町である南伝馬町が、京橋まで一〜三丁目と続く町並みをつくっていました。そしてこの形は明治まで変りませんでした。

南伝馬町とともに本町通り（現在の江戸通り）で伝馬役を勤めに大伝馬町・小伝馬町の三町の人々は、徳川家康が江戸に来る前から、日比谷入江（現在の皇居外苑）の海岸線の集落である千代田村・宝田村・祝田村の住民でした。この三村の〝原住民〟に伝馬役を命じ三つの伝馬町をつくらせたのは、家康のすぐれた〝経営感覚〟だったといえましょう。この三伝馬町は〝江戸八百八町〟の筆頭とされ最も尊重されました。のちの神田明神・日枝山王の天下祭りには、必らず三伝馬町の山車が先頭に立つことが恒例だったほどです。

◇歌舞伎発祥地

ここで先号に続いてふたたび「江戸歌舞伎」に話をもどしますと、その発祥地は、この水陸交通の中心地〝中橋交差点〟の一角にあったことになっています。

『中央区の文化財／史跡・旧跡・文化財』（中央区教育委員会刊）で、この〔旧跡〕の「江戸歌舞伎発祥の地」の説明を見ますと、つぎのように書かれています。なおこの記事は『中央区史』の文章をほとんどそのまま引用したものです。

「東都の劇壇で最古の伝統と最高の地位を担った中村座が、中橋南地（中橋は、京橋と日本橋の中間にあった）に太鼓櫓を許されたのは、寛永元年（一七一五）二月十五日である。

中村座の始祖猿若勘三郎は、中村勘兵衛の次男で京都に住み、大蔵流狂言をよくし、のち歌舞伎に転じて「猿若」を始め、〔その名を〕天下に謳われたために猿若と名のり、元和八年（一六二二）江戸に下り、奉行板倉四郎左衛門の許可を得て、猿若座（中村座）の櫓をあげて以来、明治二六年まで二七〇年間続いた。

中橋南地には中村座のほか人形操り座・浄瑠璃座などの小屋があってにぎわっていたが、寛永九年（一七二四）五月お城に近い理由で、興業物は一切撤廃され禰宜町（日本橋長谷川町）へ移り、のち堺町に転じた。昭和三十二年七月国劇歌舞伎発祥地として永く記念すべく、碑を建立し

た。」（傍点は筆者）

とあります（なおこの引用文の中の寛永元年と同九年の西暦は、それぞれ一六二四年と一六三二年です）。

しかし寛永九年当時の図といわれる、おなじみの「寛永図」の中橋のまわりには芝居小屋などはなく、南伝馬町に相当する所には「中はし　二丁目　三丁目」ですし、橋と紅葉川の北岸に面しては「南まき町」、南岸沿いに「おが町」がありますが、江戸図屏風に描かれたような歓楽街は見当りません。

これは今号に掲載した「沿革図書」の図でも南まき町が下槇町と書かれているほかは、状況はほとんど同じだといえます。

ただし碑の説明にある寛永九年五月に、芝居小屋が移された禰宜町は、いまの人形町と蛎殻町の境いのあたり、当時の吉原の北側に隣り合って「寛永図」に書かれています（このあたりの〝海岸線〟のはなしは、このシリーズに連載する予定です）。

◇劇場の場所

西欧の諸都市では劇場はその都市の中心に建てられるのが一般的です。現代日本の場合もそれにならって、都心や副都心に劇場が集中するのが普通です。

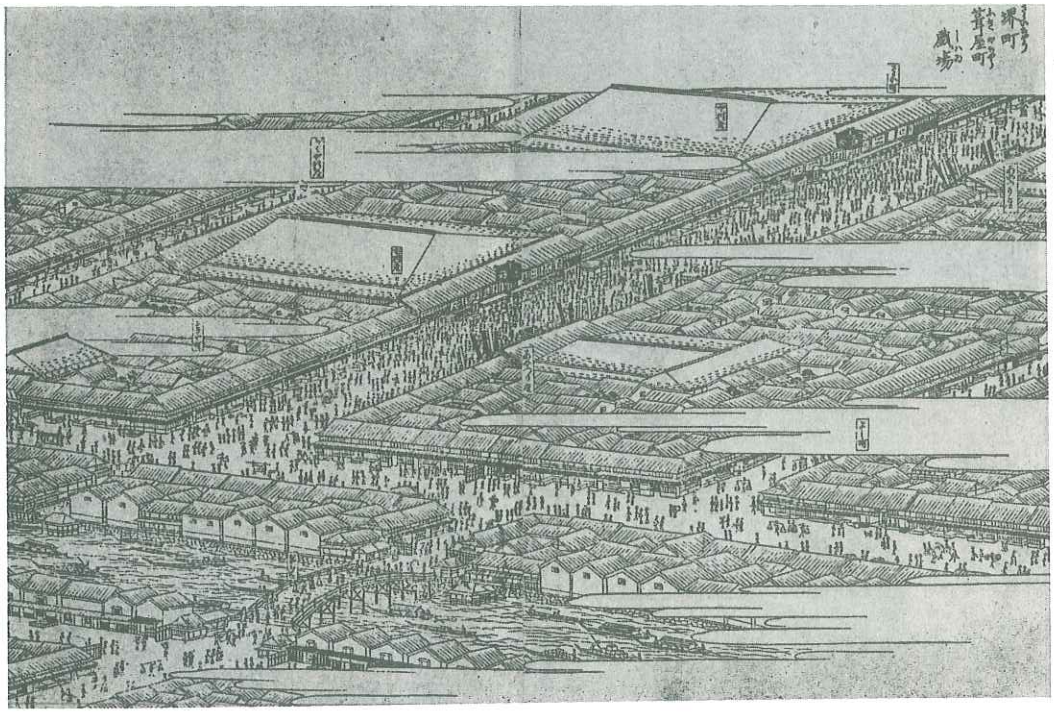
しかし約四世紀前の日本では劇場や歓楽街は主に都市の中の川の水辺にしかつくることを許されませんでした。

江戸のような臨海都市では川の水辺ではなく、海岸や埋立地の岸にそうした施設をつくることが許されました。

その場所は前号で紹介したように、初期の江戸では江戸前島の東岸に杭上家屋をこしらえ、そこに芝居小屋・遊女屋・繰り人形芝居・銭湯などの歓楽施設をつくりました。具体的にはさきに引用した「江戸歌舞伎発祥の地」記念碑の説明文の中に、二度も「中橋南地」という表現がでてきます。この「橋南地」を中橋の「南側」の意味に読みますと、馬継（うまつぎ）でゴッタ返す南伝馬町に歓楽街があることになります。

しかし「中橋南地」をさきの「寛永図」における南まき町と同じ方向の場所として読みますと、歓楽街は江戸図屏風に描かれたように、現在の久安橋の東側に相当する場所だといえましょう。それが今号の「沿革図書」中の下端の※印のある一帯ということになります。

◇歓楽街の移動



『江戸名所図会』堺町・葺屋町の劇場

「中橋南地」の歓楽街が「お城に近い」という理由で寛永九年五月に禰宜町に移されました。実はこの年の正月二十四日に前将軍の秀忠が病死しました。歓楽街の賑わいが病中の秀忠に聞えていたための移転命令とも考えられますし、前代の将軍の都市計画を若い将軍家光とその幕僚たちが、新しい計画にかえて行こうとした一つの表れとも思えますが、寛永九年という将軍の代がわりを機会に、江戸の様相も大きく変ったことも亦一つの事実でした。

歓楽街の移転先きの禰宜町は今は埋立てられた東堀留川に面した場所にありました（現日本橋堀留一丁目の一部）。その後、慶安四年（一六五一）にこの時も将軍家光が死んだのを機会に、禰宜町の南の葺屋町と堺町に芝居小屋をはじめ歓楽街は移転を命じられています。このあたりは旧石神井川の河口部で、その名残りは東堀留川・西堀留川の形で明治まで残っていました。

葺屋町は元和元年（一六一五）に「沼地」を埋め立てて町としたとの記録もあります。さらにその隣りの吉原も「葭芦生いしげる汐入り」の沼地を陸地化した、つまり海岸線であったことは広く知られています。

このように江戸の歓楽街はいつも湿地帯に設立を許されていたのです。

（三芳　亘）

◇芝居町その後

歌舞伎だけに限ってその芝居小屋の移転ルートを改めてたどってみましょう。

○寛永元年（一六二四）二月、中橋南地に中村座が許可される。

○寛永九年（一六三二）五月　中村座は禰宜町に移転。

○寛永十一年（一六三四）、葺屋町へ京都の村山座（のち市村座）進出。

○慶安四年（一六五一）、歓楽街は禰宜町隣接の葺屋町・堺町に移される。

○三十間堀川東側の埋立地にも芝居小屋成立、のちの木挽町五丁目の森田（守田）座が有名。

○天保十二年（一八四一）十月、中村座より出火、一帯焼失。はじめ再築許可が下りなかったが、金さんこと北町奉行遠山左衛門尉景元の答申で十二月十八日、浅草聖天町西隣りに移転命令が出る。中央区内の芝居・人形操り芝居すべて移転。

○天保十三年（一八四二）二月より浅草猿若町を形成、一丁目に中村座と薩摩座、二丁目に市村座と結城座、三丁目に河原崎座（木挽町から）。

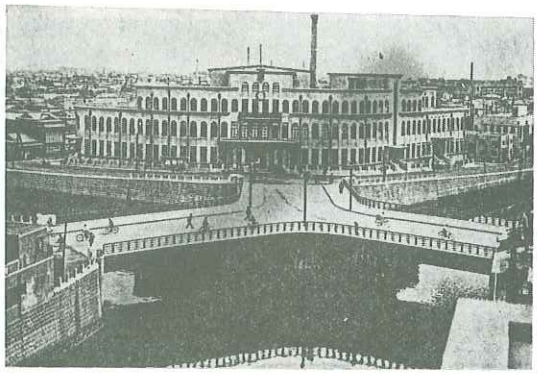
○明治以後は残念ながらここでは省略します。

◎郷土室より新着図書のお知らせ◎

「復興局　橋梁設計圖集」　全六巻

昭和三年から昭和五年にかけて、復興局土木部橋梁課の編纂でシビル社から発行された橋の設計図集です。

この設計図集には、隅田川や外濠、神田川などに架設されている三七の橋に関する詳しいデータ（写真・位置・平面図・側面図・型式並に一般寸法・下部構造・上部構造・工事など）がおさめられています。またその他に、四七の橋の親柱・高欄・街燈・橋側燈・橋名鈑について、各々材質・個数・重量・型式・寸法などを紹介しています。



各輯の内容は次の通り。

第一輯　聖橋・親父橋・兜橋・菖蒲橋
　　海運橋・豊海橋

第二輯　相生橋・永代橋・清洲橋・蔵前橋・駒形橋・言問橋

第三輯　江戸橋・美倉橋・小網橋・源森橋・八重洲橋・数寄屋橋・堀留橋・築南橋

第四輯　鎌倉橋・萬年橋・菊川橋・本村橋・横川橋・練兵橋・要橋・松島橋

第五輯　高橋・亀島橋・柳橋・柳島橋・松代橋・三吉橋・比丘尼橋・霊岸橋・業平橋

第六輯　親柱・高欄・街燈・橋側燈・橋名鈑

―東京を語る会のお知らせ――

第63回東京を語る会を、次のように開催いたします。

『私の見た昭和の日本橋・京橋の移り変り』

講師　川崎　房五郎　氏
　　（江未歴史研究家）

日時　平成3年7月6日（土）
　　午後2時～3時30分

会場　中央区立京橋図書館　鑑賞室